

注文がない——料理店

日本文化学科 米 田 利 昭

紀要の編集部から研究上のエッセーを求められたが、ぼくにとって研究上一番困ることは、どこからも原稿の注文がないことである。ここ数年間で、お前さんが書きたいように書いてくれ、と言われたのは三つか四つか。これではとうてい文筆業は成り立たないし、研究者ともいえない。

しかもその一つは、某大学出身者を中心にした田舎学会誌で、はじめは気がつかなかったが、どうも親分が子分に発表させたり、書かせたりするために作った観のあるもの。ぼくも遠い子分の一人と認定されたらしい。ありがたい幸せだ。今一つは、業界誌だが、表紙を描く男が気が乗らないからという理由で、原稿を出してから一年以上も放って置かれたような雑誌だ。しかしそれでもかまわない。注文がありさえすればいい。

アイドルたちの編集する雑誌は、出るたびぼくにも送ってくるのだが、あなたも書いてくれとは一ぺんも言わない。そんなにケイベツしてるなら、何故送ってくるのだろう。みせびらかすつもりかしら。『枕草子』の「にくきもの」の一つ。

これでも昔は注文があったのである。また注文はなくとも投稿しさえすれば載ったのである。岩波の『文学』からの注文をことわったこ

とさえある。今から思うともったいないが、自分の書き下しの本を作ることの方がおもしろいと思われたのである。当時は、じっと書き溜めることができた。それが今ではなさないことにそのネバリがなくなっている。だから一つ一つの発表の機会が必要なのだ。

時代が変って、新しい思想、思いつき、いや衣裳の下に書くことが求められるから、文体を変えられない、旧態依然たる筆者には注文しない。いや、そんな見識を持った編集者ばかりでもあるまい。その時々ボスに渡りをつけるのが編集者の仕事とでも思っている人もいよう。ボスと相談してテーマを立てる。するとボスは子分に仕事をわりふる。かなり以前からそういうギルド組織になっているのだ。ところが編集者と飲みに行くことも、社にダベリに行くこともしない、どんなグループにも属していない、一匹狐のボクのような者には注文が来ないことになり、そのまま時が経つと、え、そんな人がいるの、と誰も知らない人間になっている。

注文がない——料理店。しかも主人は他の店のものを食うのは嫌いで、自分で料理を作りたいのだ。だから田舎料理を知人に配達して、ただですからどうぞ食べて下さいと頭を下げたり、逆にお金を払いますからお店に並べて下さいませんか、と願ったりしている。

友人の出している短歌の雑誌に俳人久女の伝を連載したり、これも別の友人の主宰する短歌雑誌に、世間からはハンセン病の歌人と思われる、だがわたしは普通の人と思っている、津田治子の評伝を連載したり、また別の友人の雑誌に「賢治と啄木の」のエッセーを何度か載せてもらっている。だが、国文学専門のものを発表したい時に困

るのだ。

だから、ぼくに書かせるものあらば、たとえ悪鬼蛇蝎といえどわが友である。ぼくに書かせまいとする者あれば（そういう人がいるのだ！）いくら上品ぶつても不倶戴天の敵である。

さいごに勝つ、つもりではいるが、とうていおぼつかない、まず駄目だろう、とも思っている。

国会図書館へ行つて、山本健吉や少し毛色は変るが梅原猛など、それぞれかつて大活躍した人たちの本を探すと、ひっそりと、ほとんど誰も利用していない風にして出してくる。文学研究者などすぐに忘れ去られるのだから、勝つも負けるも大差ないと言え言える。